

序

書道は私にとっては、いわゆる専攻の題目ではありません。しかし、少年の頃以來、一日としてこれと離れることができず、数十年來、熱愛を続けてきた生命の糧であります。まことに書の芸術境こそは、至高至樂、去らんと欲するも能わざる美の奥境であり、書道は人生の美的境涯に透徹するの大道であります。

本書は、書を学ばんとして良師を得ざる同好の友の為に、数年にわたって所信を講じたものであります。従つて書道に入るための一通りのことは、こまごまと述べることに努めました。

しかしながら主とするところは、書道芸術奥境の探究と、これに到達する修行鍛錬の心的物的方途の闡明せんめいとにありました。しかも先人恩師に教えられつつ己の体験に依るところを主と致しました。

もし幸いにして本書が、世の達識練達の士の御目に触れることがあって、叱正と高教とを賜わる機会を得ましたならば、望外の幸いであります。

昭和十八年一月

秋津竹陵

序

第一章 生活と書道……9

一 生活と書道 9

三 だれでも上達する 12

五 手本 15

七 姿勢・執筆 16

九 姿勢の意義とその必要 20

二 手習いの徳 10

四 上達の秘訣 14

六 用具 15

八 露鋒・蔵鋒 18

第二章 筆・用筆法……25

一 文房四宝 25

三 筆力 27

五 日頃の心得 32

七 どうすれば気脈一貫の書が得られるか 36

二 筆に生命あり 26

四 文字を書く時の心得 29

六 脈絡一貫のこと 34

第三章 芸術としての仮名書道……………39

- 一 仮名書道の位置 39
- 二 象徴芸術の王座 40
- 三 かなは象徴の極致 42
- 四 仮名についての誤解 44
- 五 仮名は弱くてはならぬ 46
- 六 どうすれば強く書けるか 47

第四章 学書三燈（一）……………51

- 一 良師 51
- 二 芸道の師弟 56
- 三 恩師 58
- 四 師に学ぶの道 62

第五章 学書三燈（二）……………63

- 一 良書 63
- 二 良書を選択 66

第六章 学書三燈（三）……………71

良友 71

第七章 書道上達の秘訣……77

一 自分は下手だときめぬこと 77

二 上手だと鼻にかけぬこと 80

三 一貫不断の練習 81

四 いつも喜んで進んで書くこと 82

五 大家の書を多く観る 83

六 暑中げいこについて

(書道躍進の好機) 83

第八章 行きづまりと型にはまること(向上の関門)……87

第九章 臨書について……101

第十章 和様と唐様……110

一 成長の必然性 111

二 書道史の動き 113

三 統一は創造である 115

第十一章 書の鑑賞(その一)……118

	一	書道の根本	118		二	書道のゆくえ	122
	三	鑑賞のよろこび	124				
		第十二章	書の鑑賞（その二）	………			129
		鑑賞ということ	129				
		第十三章	愛書の説	………			136
	一	人の書と己の書	138		二	文字を大切に	142
		第十四章	何が為に書道を習うか	………			144
		第十五章	書道芸術と婦人	………			151
		第十六章	空所と書道	………			158
		書き初めの意義	164				

第十七章 芸術書道……………166

第十八章 書道の奥境……………175

一 新しいとは 175

三 書は道として樹立せられたか 179

五 書道錬成の両面 182

七 朝鍛夕錬 186

二 書道の本質 177

四 書論と練習 181

六 奥境到達の方法 183

第十九章 書道随感……………190

芸能稽古と競争意識 190

物を大切に 199

一貫錬磨 206

「十七帖」攻略の参考書 213

万象わが師 217

書道と心のひきしまり 196

書は至心の結晶 201

書の楽しみ 210

書道向上の念願 214

書の上達 219

雅と俗 222

滅私錬成の芸術道 234

調子を高めよ 238

書道勃興の気運 241

文房四宝 256

書道は日本精神鍛練道なり 226

純動即純静 237

薰風 240

書道入門手引 243

書は心 259